

第二百十七圖

前圖黒十九よりの變化。

本圖の如く黒十九以下二三までの手段は白二四と下られる筋があつて、黒の不成功に歸する。

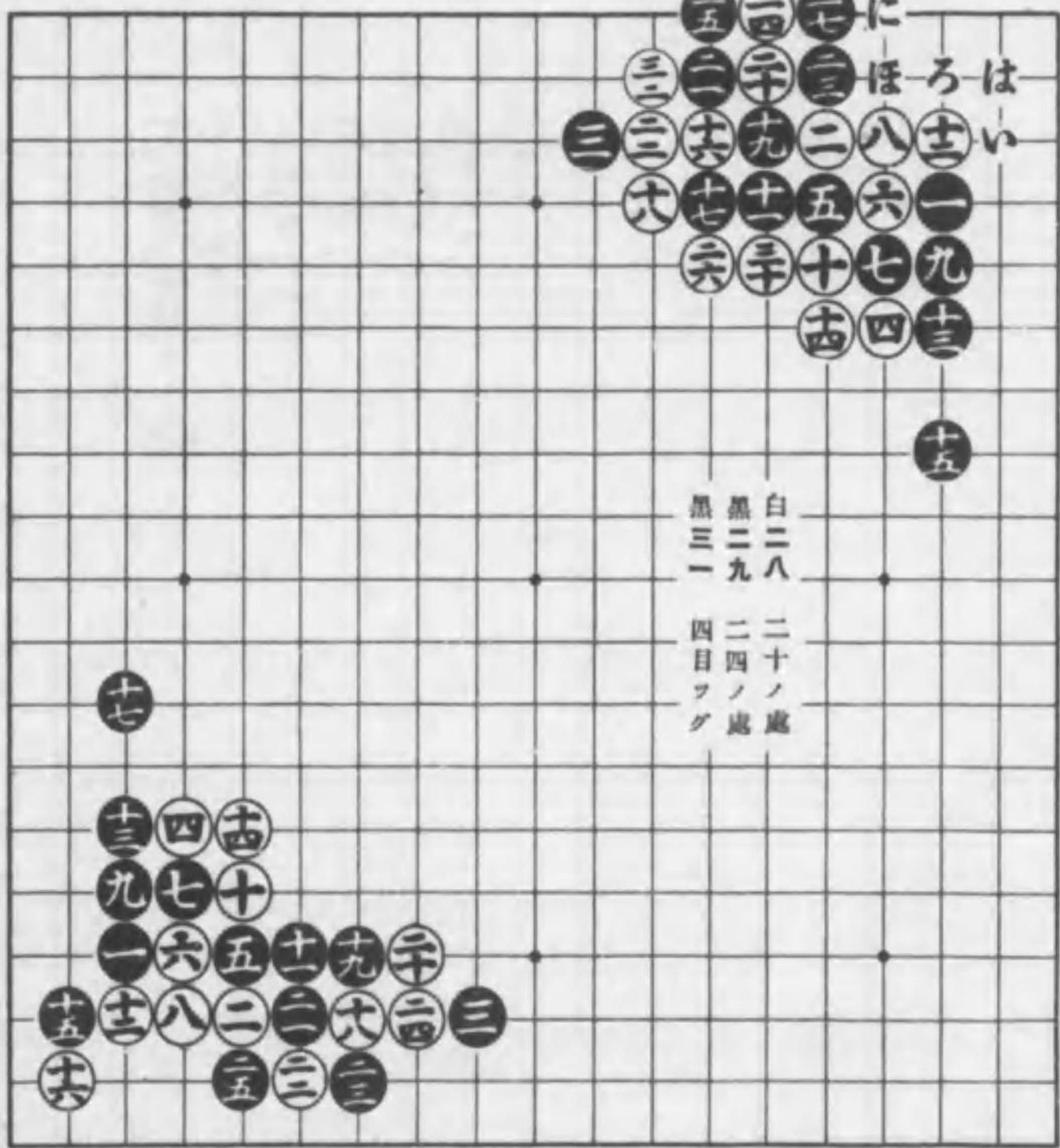
黒二五の押へ乃至黒三一のツギは必至、續いて白三二の押へとなつては、次いで黒「い」とハネても、白「ろ」黒「は」白「に」となつて白の勝。

手順中、黒「い」を「ろ」に代へても、白「い」黒「は」白「ほ」となつて黒の敗。

第二百十八圖

黒シチャウ不利の場合は、黒十七とトップ前に十五とハネ白十六と交換して置くのが肝要の手順。随つて白十八は黒十五白十六の交換に満足して、二三に走る外はない。圖の如く前圖の筋を辿つても、黒十五のある關係上、却つて白の破綻に歸する。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



第二百十九圖

本圖は天保六年棋界の視聽を集めた吐血の名局、本因坊丈和對赤星因徹(前者白中押勝)の争棋の一部である。

白十二までは普通の経過、續いて黒十三、十五と運んだのは、白十八に次いでかく十九とツギ、隅の白に幾分でも虐めを利かさうとの企圖に外ならない。

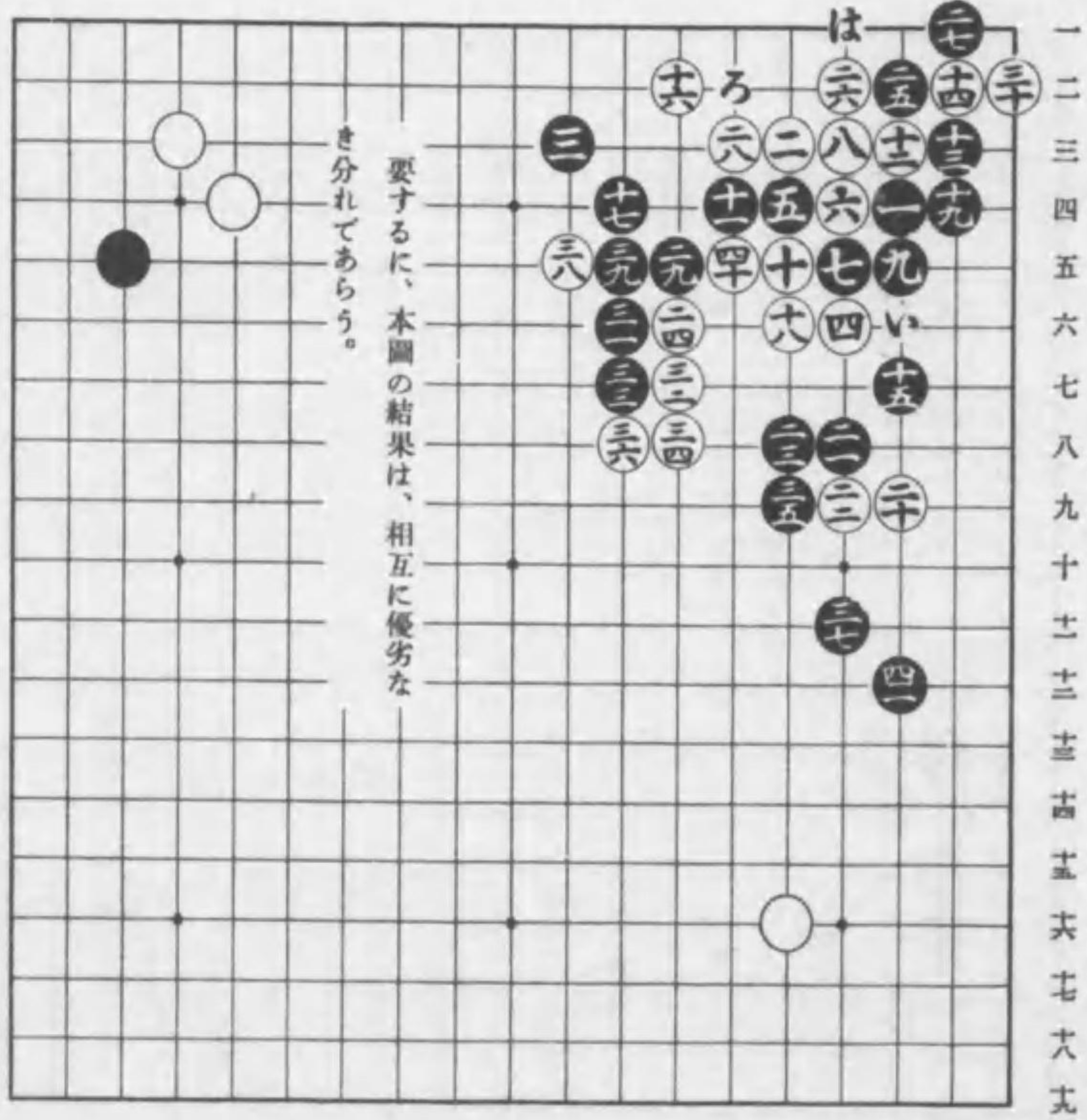
現時に於いては、黒十三で單に「い」と打つのを通型とするが、當時はこの黒十三、十五の型が屢々用ひられて居る。

白二十では二一にカケるのもあり、單に三三と軽く外すのもある。

黒二五、二七には劫争の狙ひが籠つて居る。即ち白二八で三十に下ると、黒二八白「ろ」黒「は」で直ちに劫が成立する。

黒二九と先手にコスミツケる事が出来たのも、前述黒二五、二七の筋が齎す成果であり、此棋は以下黒四一までと運ばれて居る。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



第二百二十圖

黒五の並びが天保時代の打棋に数多く表はれて居るが、近時に於いても趣向として稀に踏襲されて居る。

此の黒五の並びは、七のトビと「い」のトビツケとを見合つた比較的簡明な變化を望んだ手法である。

次いで白六黒七となつて、本定石は一段落とされる。

第二百二十一圖

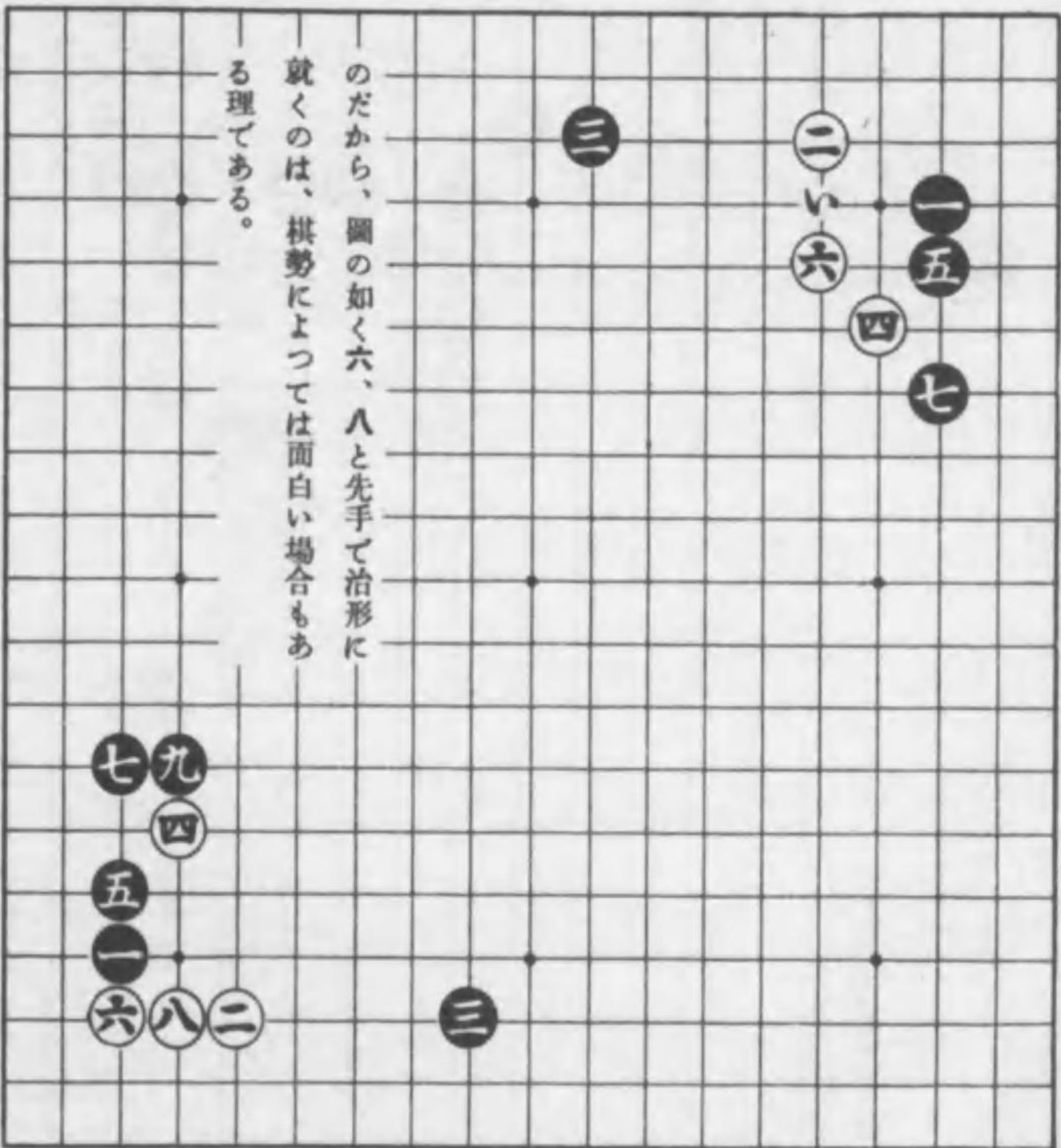
前圖白六よりの變化。

白六のツケは、十一世井上因碩(幻庵)の新工風によるもの、當時としては斬新な型である。

此の白六の著意は、二の白の治形を速かならしめるに存し、黒七以下九までの應酬は此位のものであらう。

元來白二は黒一、三の夾撃を蒙つて居る

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



のだから、圖の如く六、八と先手で治形に就くのは、棋勢によつては面白い場合もある理である。

第二百二十二圖

黒シチャウ不利の場合は、白六に對する黒七のトビは不可、大圖の如く打たねばならない。

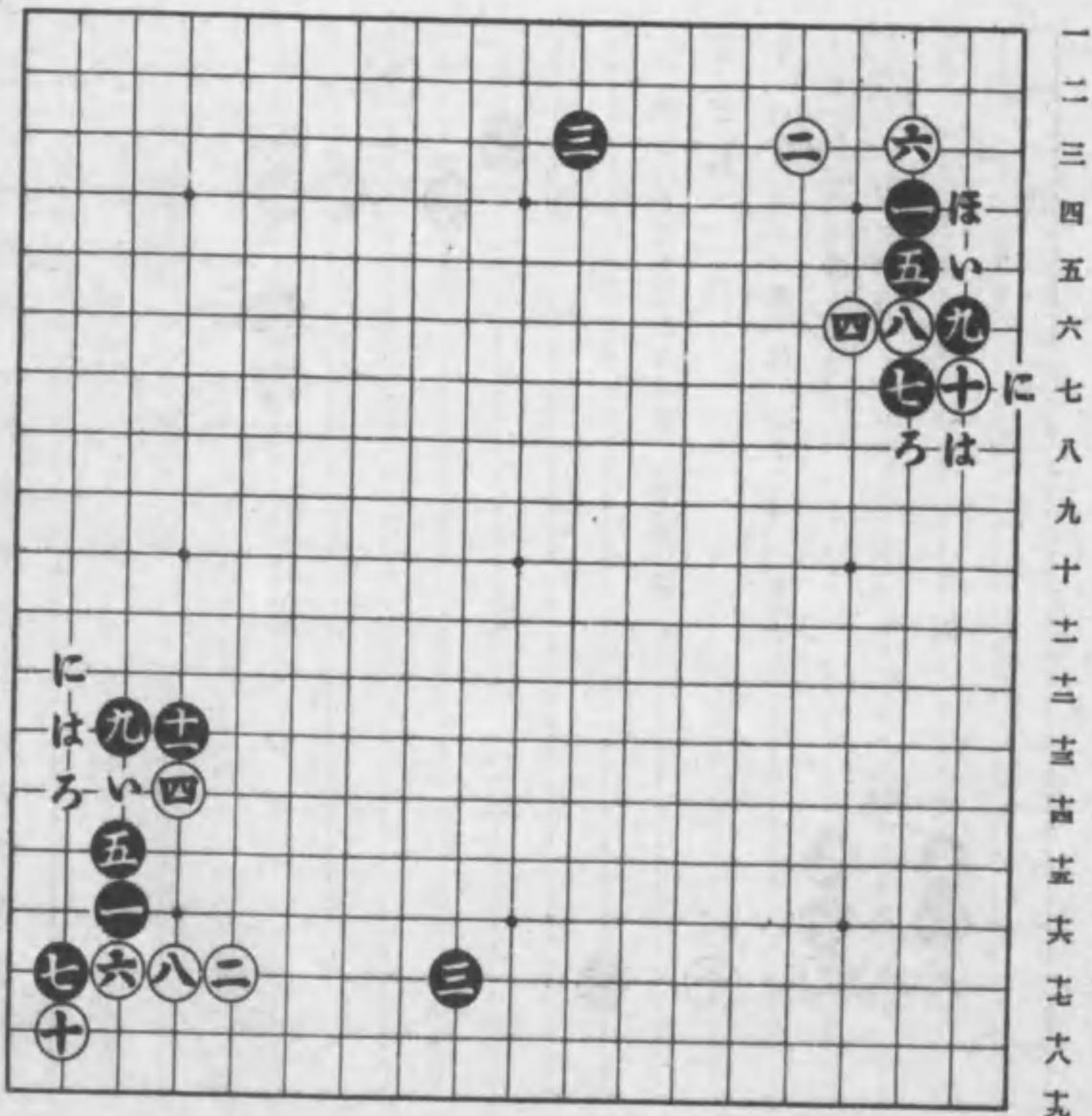
即ち白八、十と出切られて黒は應答に窮する。假りに黒「い」にツグものとする白「ろ」のシチャウで黒不利だし、若し又黒「は」に抱へるものとする、白「い」黒「に」白「ほ」となつて、矢張り結果は黒が恵まれない。

第二百二十三圖

黒シチャウ不利に處する道は、本圖の如く七とハネてから九とトブに限る。

以下黒十一までとなつた場合、前々圖に比して黒七白十の交換が幾分黒の不利ではあるが、シチャウの関係上己むを得ない。猶白十で「い」は、黒「ろ」白「は」黒「に」となつて、白の無理に移る。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



第二百二十四圖

本圖の如く黒七とトビツケる筋もあるが結果は酬ひられない。

白八は此の一手、九にハネるのは、黒に八とハネ込まれて面白くない。

黒九に對する白十の走りは、悠々迫らぬ好着である。

黒十一に次いで白は他に轉じても差支へたいが、かく十二と打つて「い」の出切りを狙ひ、十四までと運んでも十分の姿である。

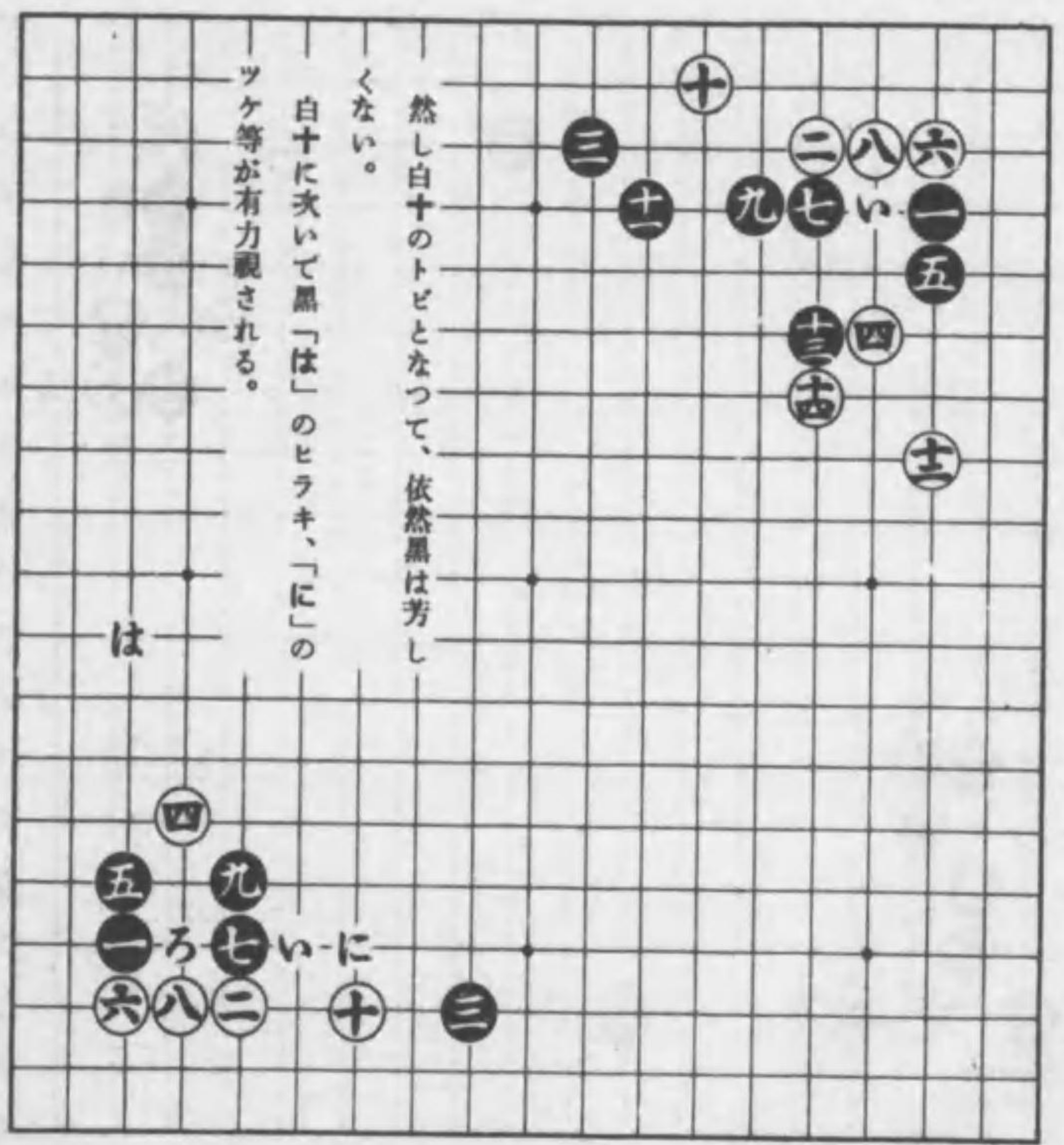
猶本圖黒十一までの型が、幻庵因碩の著書に掲載されて居る。

第二百二十五圖

前圖黒九よりの變化。

前圖に於いては、黒九で「い」にノビたが、白に「ろ」の出切りの筋を残して面白くないので、かく黒九と並んだのである。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



然し白十のトビとなつて、依然黒は芳しくない。  
白十に次いで黒「は」のヒラキ、「に」のツケ等が有力視される。

第二百二十六圖

前圖黒七よりの變化。

黒かく七とハネ込むのも、白八、十の應接によつて徒勞に歸する。

本圖白十までの型は、自分と小野田六段との共著になる某書に載つて居る。

本圖の結果を検討するに、白六の一着が恰も捨石の活用に適つて居る。

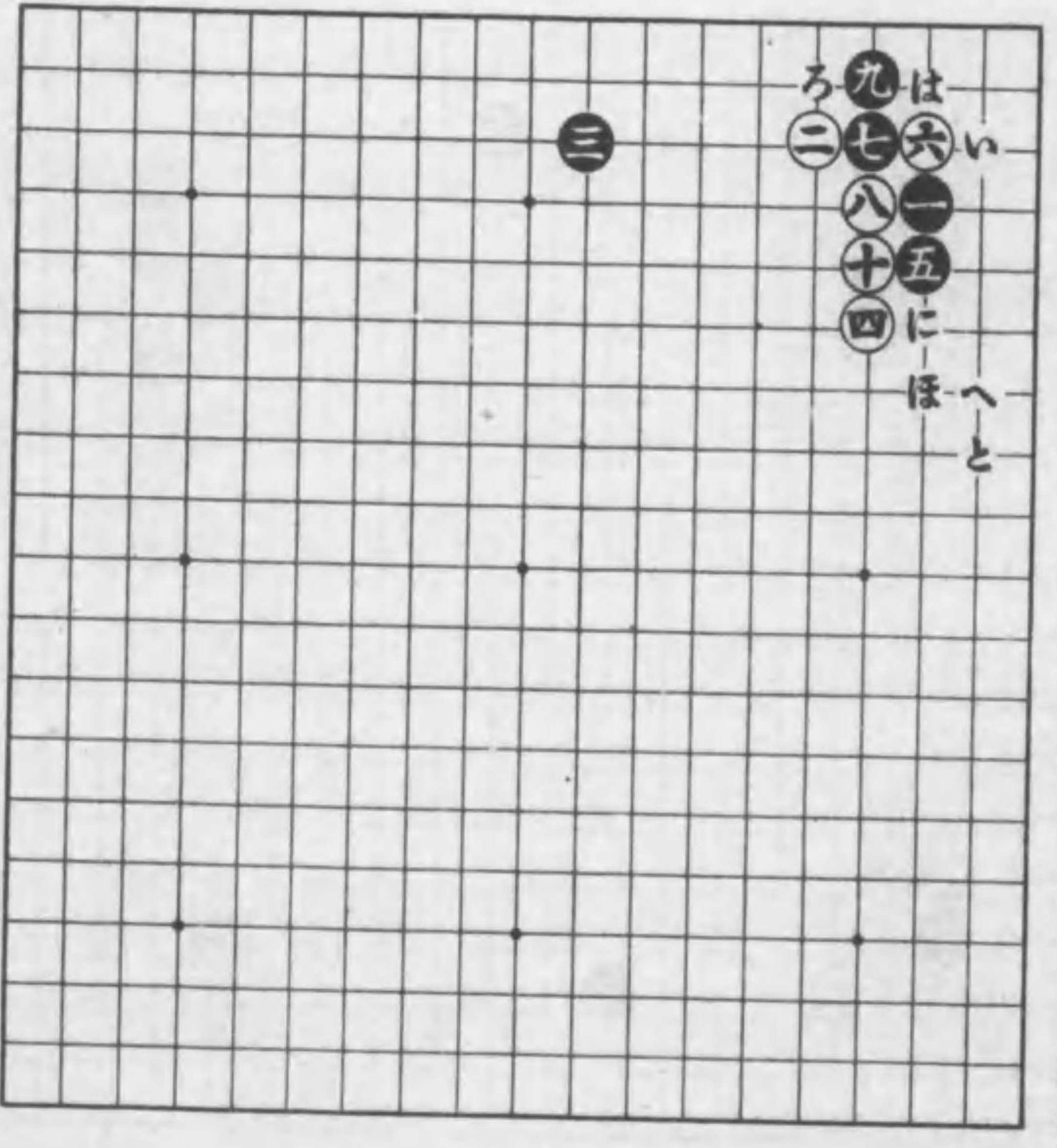
即ち次ぎに黒「い」なれば、白「ろ」黒「は」白「に」となるし、黒「は」から押

へるのは、白「に」黒「い」で前と同一結果になるし、黒「に」に押して来るのは、白一旦「い」と下るのが手順、次いで黒

「ろ」の匍ひならば、白「ほ」黒「へ」白「と」と二段にハネる筋があり、何れにしても黒有利の結果は期待出来ない。要する

に本圖は黒に隅の熱居を強要する意味に於いて白が面白く、廻つて白八で九に受けると、その反對の結果が想定されるのである。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



第二百二十七圖

本圖より白四の小ゲイマガケの定石に移る。

白四のカケは本圖黒三の間バサミの場合にのみ限らず、「い」の間バサミ、「ろ」の間バサミの時にも用ひられる。

黒七まで最も普通の定石である。

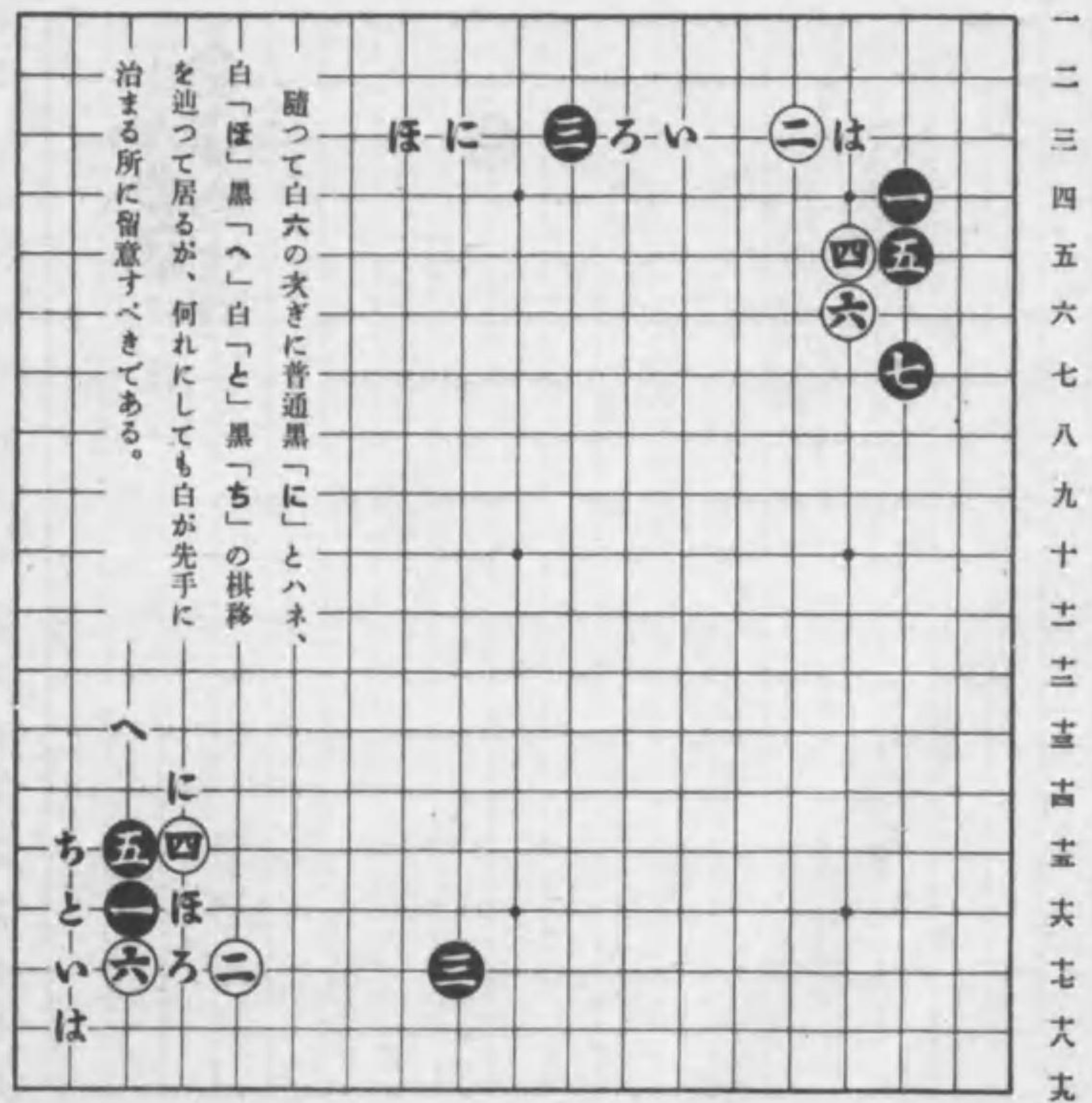
本圖白四、六の運びは、黒「は」の攻撃を緩和する意味で、黒七に次いで白「に」又は「ぼ」等に迫つて黒のヒラキを阻止するか、或は全然他に轉じるか、棋勢によつて去就を決すべきであらう。

第二百二十八圖

本圖白六のツケは味はふべき著手で、幻庵因碩の新工風のやうに記憶する。

白はかくツケて早く治形に就かうといふのであつて、黒次ぎに「い」ならば、白「ろ」黒「は」白「に」と運ぶ意味である。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



随つて白六の次ぎに普通黒「に」とハネ、白「ぼ」黒「へ」白「と」黒「ち」の棋移を辿つて居るが、何れにしても白が先手に治まる所に留意すべきである。

第二百二十九圖

前圖白六に次いでの変化を示す。

前圖説明中に述べた如く、黒九を「い」にカケツダ普通でもあり、穩健でもあるが本圖は九とハネる積極手段に就いて述べて見る。

白十の切りは此の一手、十一に下つて黒「い」のカケツギを許すのは、概して不可とされる。

黒十一乃至十五は他に打方もない所だが就中、黒十三は玩味に値する。

白十六に次いで黒「ろ」ならば、白「は」と肩を衝く要領である。

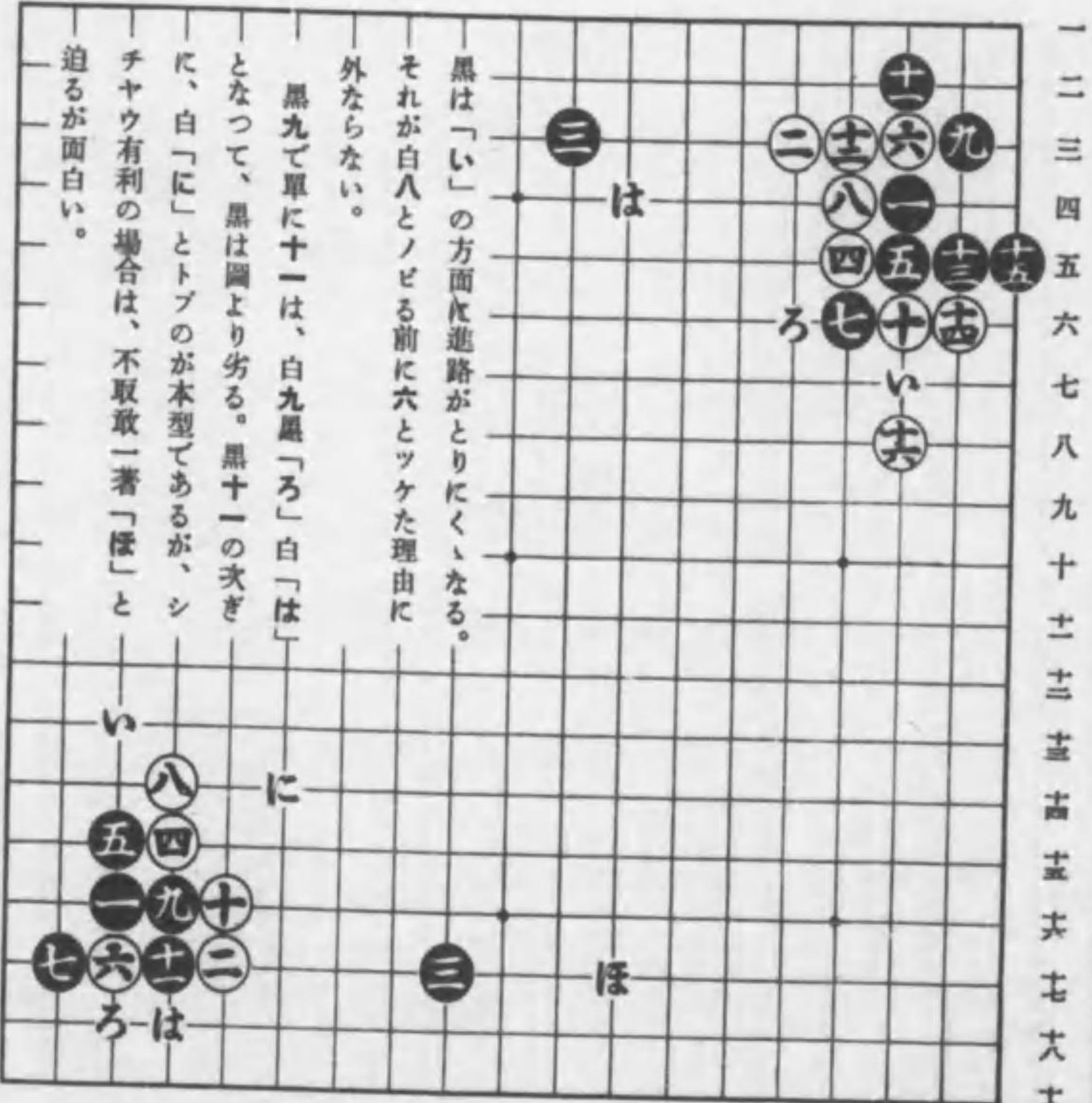
本圖は黒場合を撰ぶの要があらう。

第二百三十圖

前圖黒七よりの變化。

かく黒七とハネたならば、白八とノビる事が多い。白六黒七の交換がある關係上、

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



黒は「い」の方面に進路がとりにくくなる。それが白八とノビる前に六とツケた理由に外ならない。

黒九で單に十一は、白九黒「ろ」白「は」となつて、黒は圖より劣る。黒十一の次ぎに、白「に」とトブのが本型であるが、シチャウ有利の場合は、不取敢一著「ぼ」と迫るが面白い。

第二百三十一圖

前圖黒七よりの變化。

自分が初段當時、現鈴木爲次郎七段（當時三段）に對し、かく七と出たのを記憶するが、俗筋たるを免れなかつた。

矢張り、「い」とハネる通型に従ふか、「ろ」とハネる臨機の處置を採るべきである。

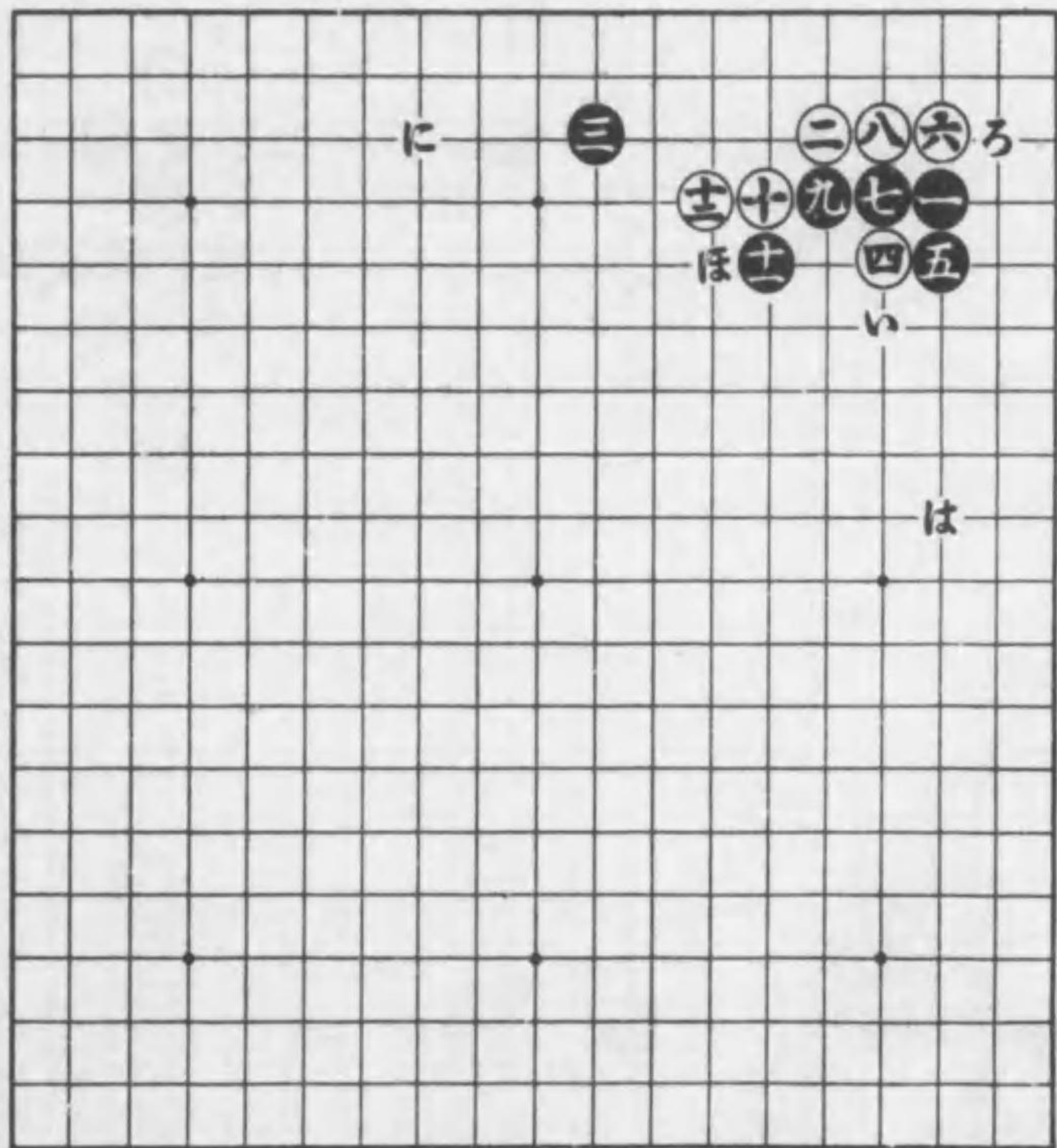
黒七と出た以上、白十二までは避け難き應酬であらう。

白十二に次いで黒「は」のヒラキを想定して見ても、三の一子が白の堅牢に近接して居る意味から、白が優るのである。

黒三が他の方面に打著されて居るものとして、初めて互角の分れといへやう。

本圖は、白後に「に」の邊より迫り、黒の逃げる拍子に、「ほ」と曲つて行く筋が眼に映ずる。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



第二百三十二圖

本圖から白四と三間にハサミ返す定石に就いて述べる。

白四で「い」にハサミ返し、黒五白「ろ」とヒラくのが定型とされて居るが、本圖はそれに比し敵の堅きより一歩遠ざかつて居るのが、白の働らきとされる。

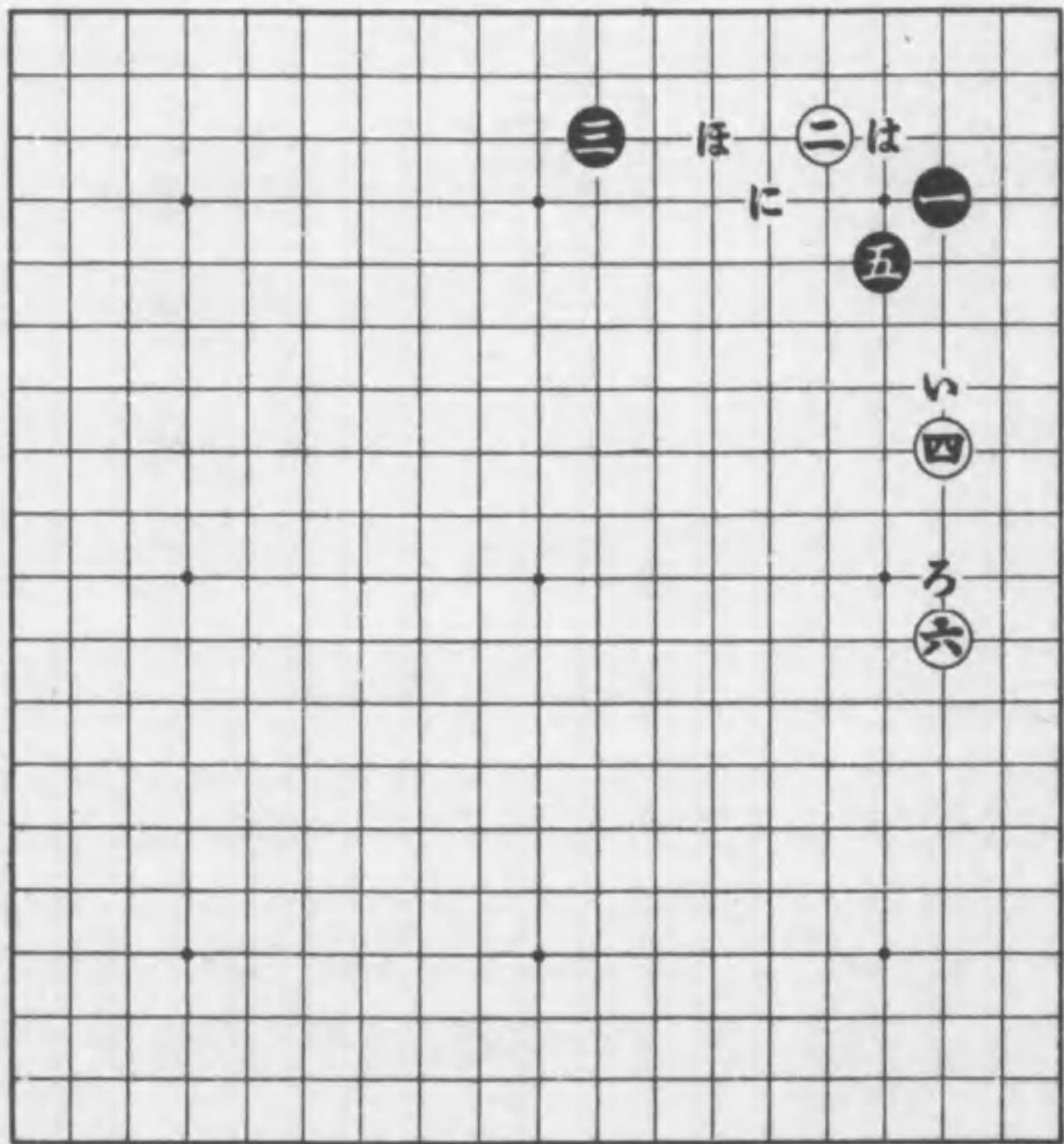
又此の白四のハサミ返しは、道策道知の昔しに遡つて試みられて居り、現時に於いても屢々用ひられて居る。

黒五は白四が「い」の場合には必然であるが、本圖に於いては「は」とコスミツケる手段が成立する。（次圖以下参照）

要するに、白六までとなれば、白の満足出来る構圖である。

白六の次ぎに黒「は」とコスミツケる手段もあるし、又「に」とカケ白「ほ」と交換して、徐ろに趣向を講ずる打方もあるわけである。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



第二百三十三圖

黒五で前圖の如く「い」にコスむのは、少しく利かされの感がないでもない。その建前から黒がかく五とコスミツケる事になるので、「い」のコスミより急迫した意味を含んで居る。

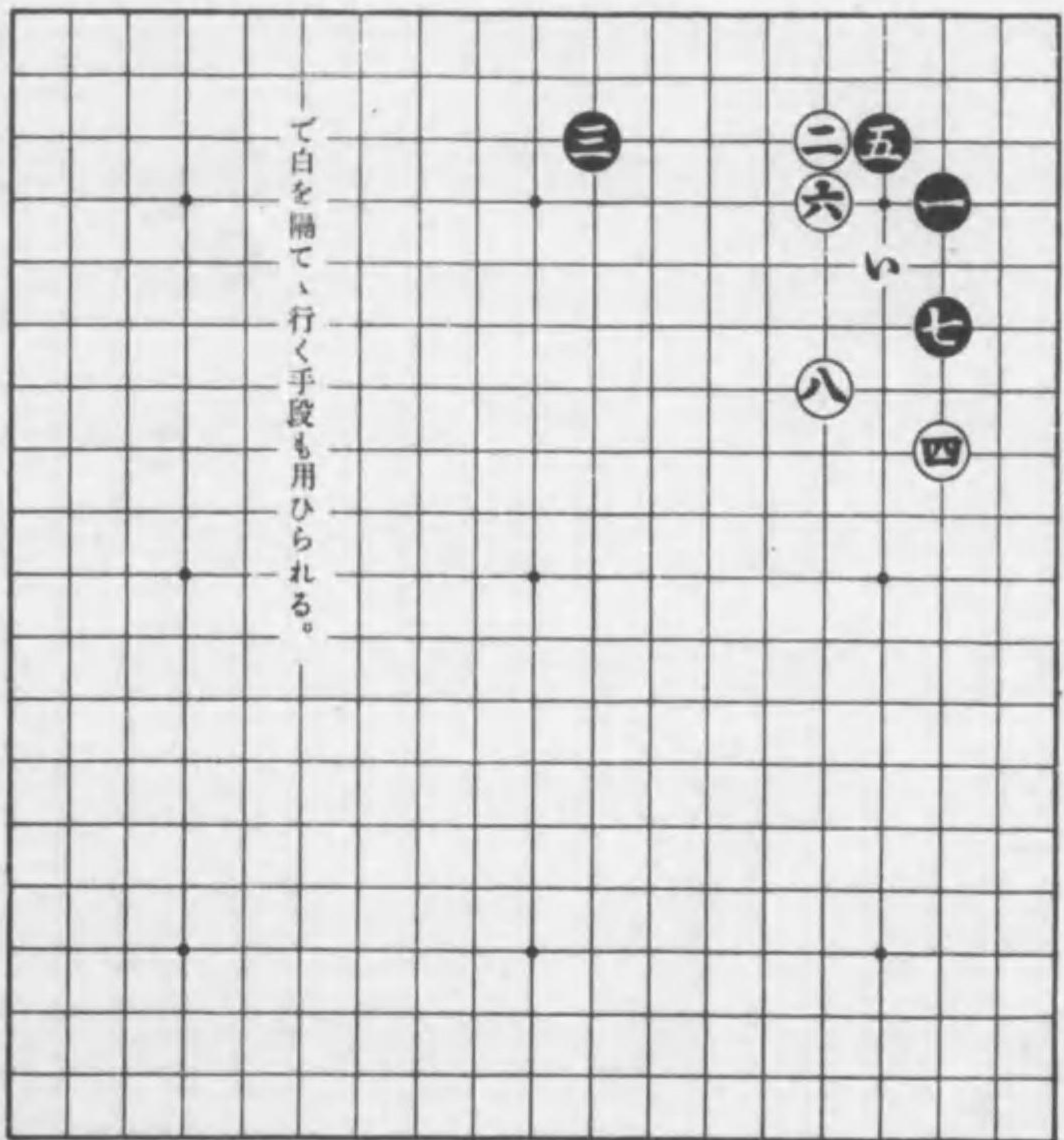
その何れを擇ぶかは、周囲の棋勢によつて決定すべきで、例へば他方面の黒が大體治形に就いて居る場合には、本圖黒五が適切とされるし、他方面の黒が手薄い棋勢に於いては、黒「い」のコスミが穩健とされるのである。

白六では後圖に示す如く、「い」とカケる烈しい打方も成立する。

黒七白八ともに普通、白八は事態急を告げた場合に「い」のコスミを利かさうの構へであつて、これを怠ると黒から八の點に躍進される。

猶黒七のトビで「い」にコスミ、飽くま

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



て白を隔て、行く手段も用ひられる。

第二百三十四圖

前述の通り、黒五に對しかく白六とカケる厳しい手法がある。

敵に對し高にかゝつて行く、一步先んじて行くといふ點に、烈しさが籠るわけであつて、此の手は矢張り既に道知時代の打棋に散見される。

白六に次ぐ變化は、以下圖を追つて説明する。

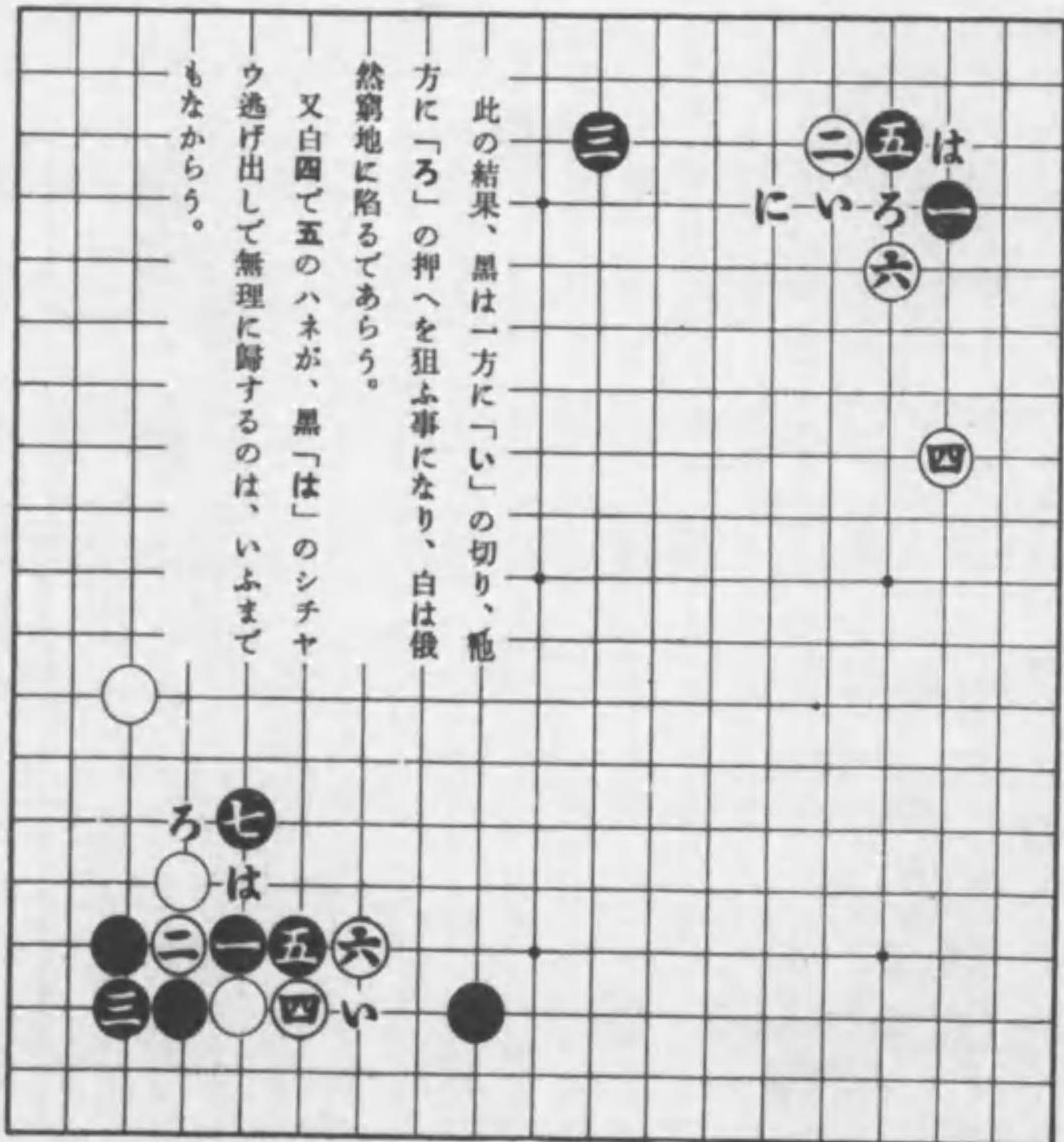
但し白六の手も、次いで黒「い」白「ろ」黒「は」白「に」のシチャウ不成立の場合には敢行不能だから、特に留意せねばならない。

参考圖

前述シチャウ關係を参考圖によつて示して見る。

白四で五とハネるシチャウが成立しない場合は、黒七までは必然の運びである。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



此の結果、黒は一方に「い」の切り、他方に「ろ」の押へを狙ふ事になり、白は俄然窮地に陥るであらう。  
又白四で五のハネが、黒「は」のシチャウ逃げ出して無理に歸するのは、いふまでもなからう。

第二百二十五圖

本圖白十までの棋移を、現本因坊(秀哉)對秀榮名人の實戦に見受ける。其他の打棋にも勿論散見される。

黒七はかく備ふ手と、「い」にグヅんで切る手段とがある。

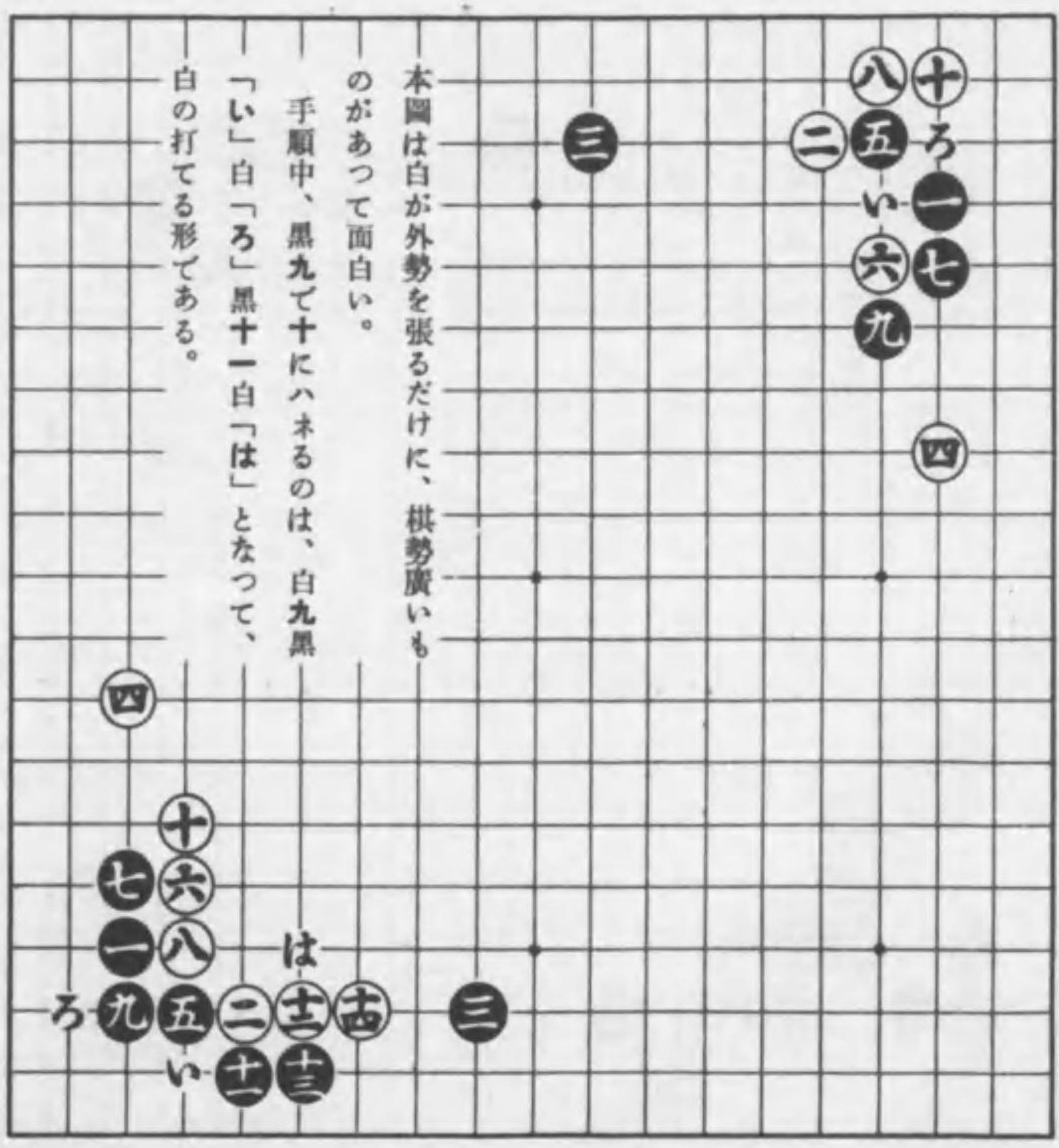
秀榮時代までは、黒七に對する白八のハネが通型とされたが、其後に至り下圖の如く進化訂正されるに至つたのである。

黒九は快心のハネでこれに限る。白十は八に伴ふ豫定の遂行。但し黒九で十に押へるのは、白「い」黒「ろ」白九となつて、黒の不利明白である。

第二百二十六圖

かく白八と當て込む手段は、自分と小野田六段との共著にも掲げてある通り、自分等の新研究かと思はれる。かくて白十四までとなつて一段落の形、

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



本圖は白が外勢を張るだけに、棋勢廣いものがあつて面白い。  
手順中、黒九で十にハネるのは、白九黒「い」白「ろ」黒十一白「は」となつて、白の打てる形である。

第二百二十七圖

文政四年林元美對本因坊丈和、後者先番勝の一局に本圖の型が表はれて居る。

惟ふに兩師共七段當時の打棋であらう。

黒七、九の出切りは、古く道知時代の實戦にも見出し得る。

「戦は切り違ひより」の譬へ、こゝに一戦は免れぬ所である。

白十は三子の黒をダメツマリにする意味であり、黒十一も何れもかくハネて居る。

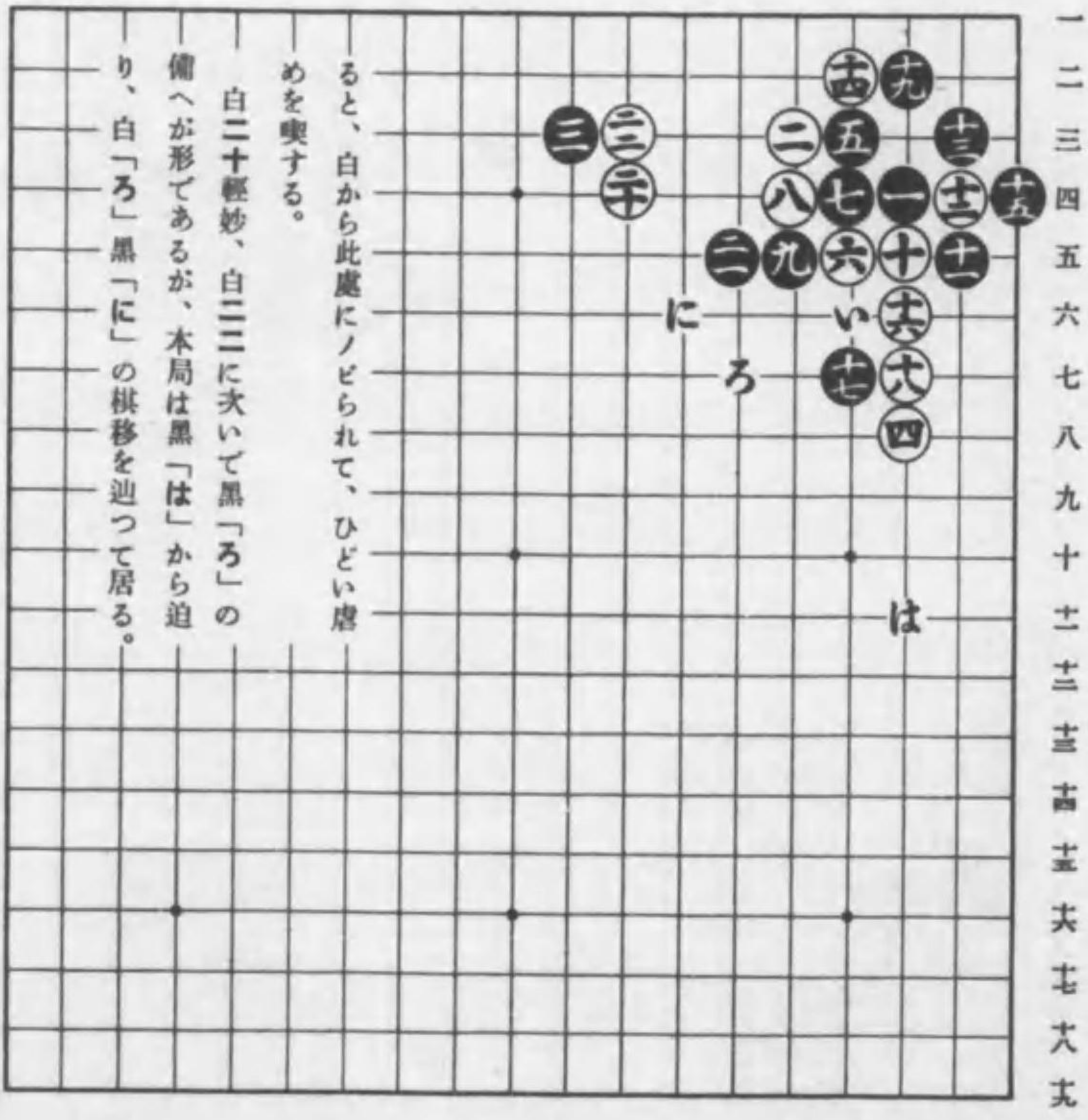
白十二の捨石は筋を行くもので味ふべくこれによつて、黒「い」のシチャウを封じて居る。

白十四黒十五は當然、白十六は道知時代の打棋にも多く見られるが、本局も同型を踏襲して居る。

然し此手は間もなく十七とコスむ筋の発見によつて、顧みられぬやうになつた。

黒十七は所謂利かし徳、續いて十九を意

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



ると、白から此處にノビられて、ひどい虐めを喫する。  
白二十輕妙、白二二に次いで黒「ろ」の備へが形であるが、本局は黒「は」から迫り、白「ろ」黒「に」の棋移を辿つて居る。

第二百二十八圖

前圖白十四よりの變化。

本圖二五までの型を、秀榮名人(白)の打棋に見出す。恐らく白得意の一局であらう。

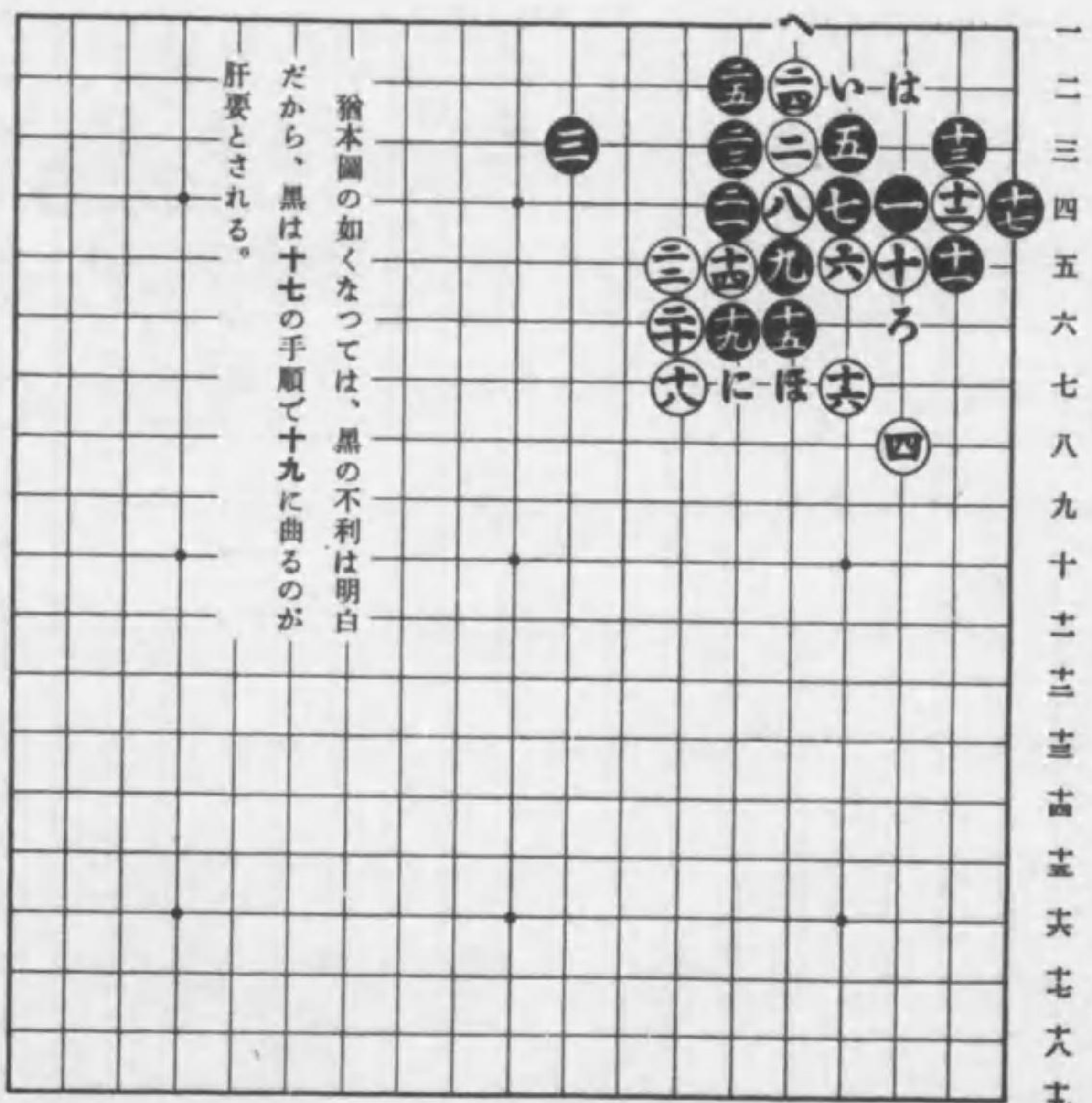
前圖では白十四で「い」にハネ、黒十七の時白「ろ」と曲つたが、本圖の如く白十四、十六の運びを採つたのは、更に積極的意味を含んで面白い。

黒十七を怠ると、白「い」とハネられ黒十七白「は」となつて、既述の通り處めが甚だしい。

白十八のカケが妙着、以下黒二五まで必然であるが、眞に捨石の妙用といへやう。

結局白から「に」「ほ」を利かされ、黒「い」「へ」となつて、白の外勢は厚壯を極め、隅に與へた黒地二十三目に比すれば遙かに優るものがある。況して手数に於いて白が一手少ないのだから、問題にならない。

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



猶本圖の如くなつては、黒の不利は明白だから、黒は十七の手順で十九に曲るのが肝要とされる。

第二百二十九圖

本圖白一のカケは、前圖白十八に相當して居る。實は自分は此の妙着を秀榮名人の創案に成るもののみ思惟して居たが、本圖を見るに及んで、其の淵源の古きに驚ろいた次第である。

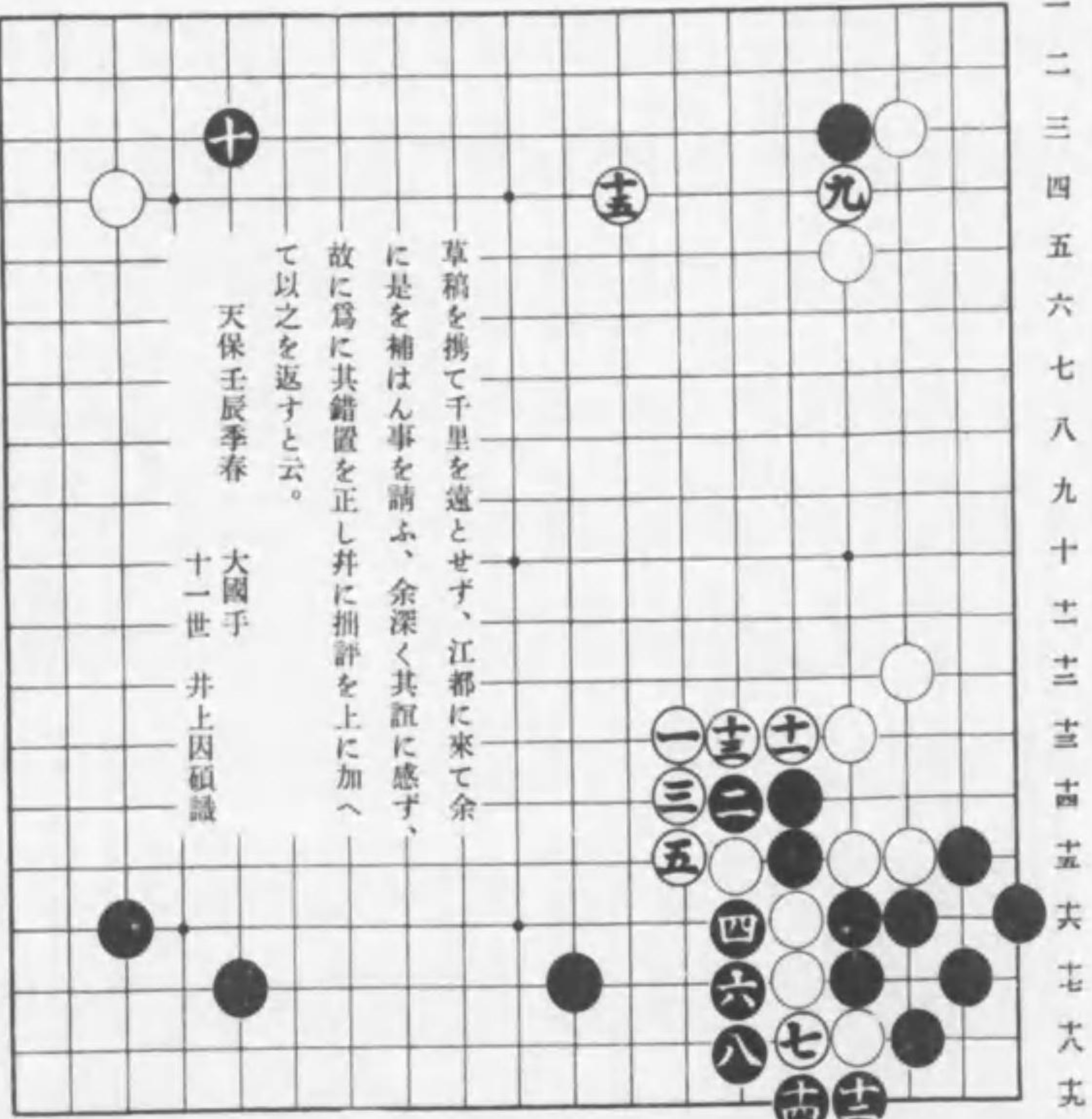
前々圖に示した通り、丈和元美時代にはまだ此筋が発見されず、其後に至つて打出されたもの、そこに定石進化變遷の跡を認め得るのである。

猶本圖は「置棋茶蹄」中に掲載されて居るもので、同書は外山算節の遺稿を河北耕之助(五段)が世に問ふたものである。

その序に――

此隅手數件は、本因坊烈元の塾弟外山算筋なる者篤く棋道に志し、從學の者頗る多し、仍て初學の一助たらん事を工夫し、書に著し梓に鏤んと欲す、其志未だ果さずして歿す、算節の知己河北氏其の志を悲み、

ツソレタヨカワヲルヌリチトヘホニハロイ



草稿を携て千里を遠とせず、江都に来て余に是を補はん事を請ふ、余深く其誼に感ず、故に爲に其錯置を正し并に拙評を上に加へて以之を返すと云。

天保壬辰季春

大國手 井上因碩識



第二百四十圖

本圖の如く、黒十一とハネる型もあるが打棋の多くは前掲の如く、殆んど「い」の方にハネて居る。

白十二の捨石は無駄のない手法、これによつて「ろ」の先手ハネが、随時約束されて居る。

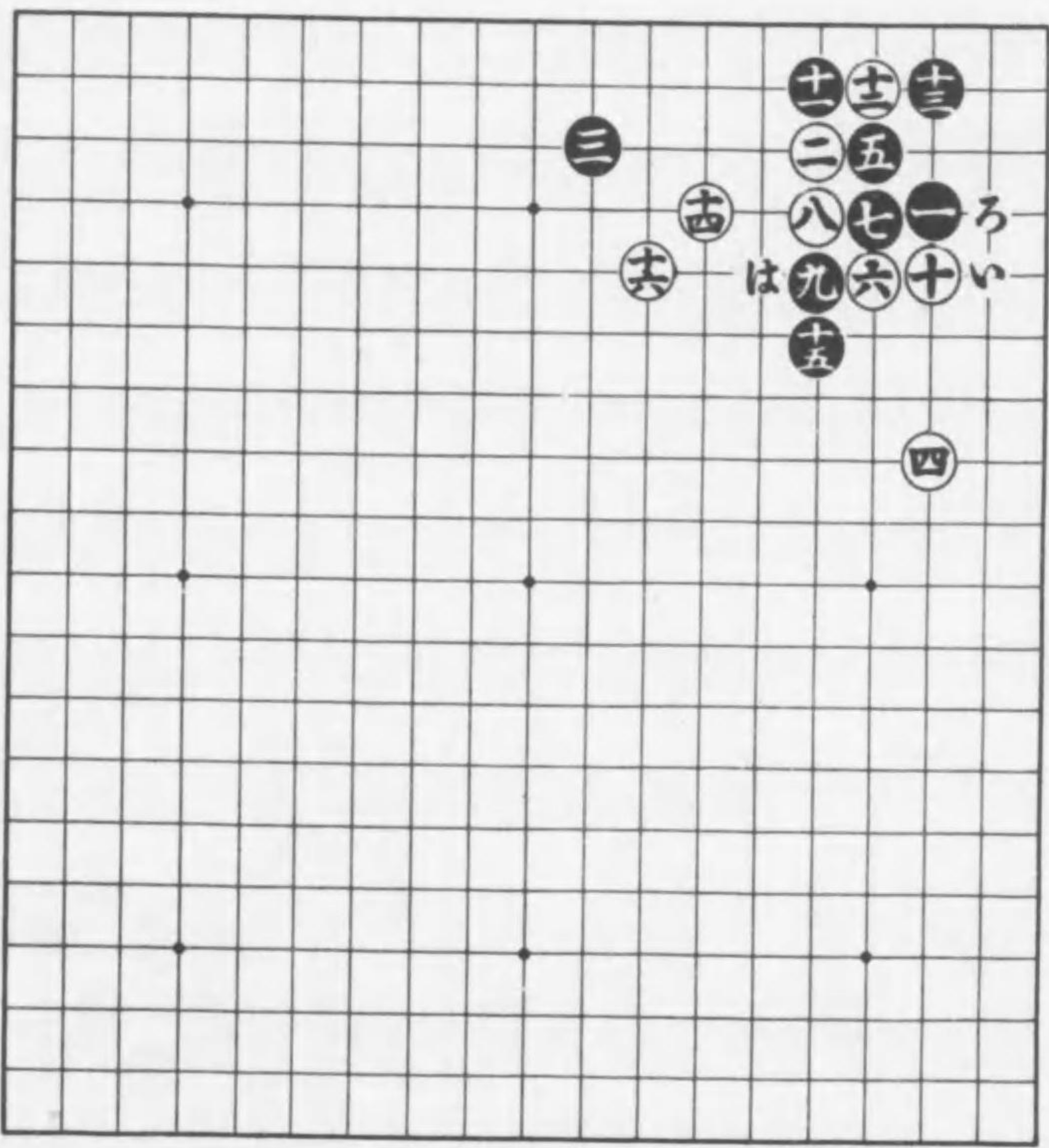
黒十三は必然、白十四とトブ前に「は」とハネて黒十五と交換するのは、初心者陥る俗な運び、心すべきである。

黒十五のノビ、白十六のコスミ、何れも歩むべき道を辿つて居るものといへる。

猶白「ろ」のハネが利く關係上、黒から白六、十の二子を取りかけに行くのは無理である。

要するに、初め黒三と夾撃されて居る白の立場から觀察するに、本圖白十六のコスミとなれば満足すべきで、廻つて黒十一が疑問視される所以である。

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨレツ



昭和十年十月十日印刷  
昭和十年十月十五日發行

著作權所有



定石進化の徑路

日本棋院藏版

著者 加藤 信

發行人 小川 菊松

印刷人 和田 助一

印刷所 東京市芝區金杉新濱町十二番地 單式印刷株式會社

發賣所

東京市神田區錦町一丁目五番地  
電話神田二二六・二二七・二二八・二二九  
振替口座東京四五三・四〇番

株式會社 誠文堂新光社

301  
104

終

